

VITALITE インタビュー

マダム・バタフライ

蝶々夫人は誰？ ツル・グラバー夫人説を検証する

暁星国際学園職員 野田 和子

聞き手：佐多保彦 株式会社東機貿代表取締役社長

佐多：『蝶々夫人』は実に感動的ですね。「ある晴れた日に」を聴くたびに胸が揺さぶられます。

野田：そうですね。プッチーニのオペラ『蝶々夫人』には原作があります。その小説が書かれてさ来年で100年になりますが、記念の上演も盛んなようです。と同時に、トマス・グラバーも最近また注目されていて、この7月から新聞小説の連載が始まりました。

グラバーという人は、幕末の1859年上海経由で長崎にやって来たイギリスの冒険商人です。主に薩摩藩や長州藩を相手に日本茶や船舶、武器などの輸出入をし、長崎最大の貿易商になりました。坂本竜馬、高杉晋作、伊藤博文、井上馨とも親交があり、「営利の商人」でありながら、「信念の実現のためには営利の範囲を逸脱せざるを得なかった」という記録があります（※1）。その他、日本で初めての造船技術、スリップ（ソロバン）・ドック建設や日本人用の教会建設などに多大な貢献をしています。

佐多：彼は日本を愛し、73歳で亡くなるまで在留した。このグラバーの妻が、ツルという名の日本女性だったのですね。

野田：ええ。談川ツルは徳川御三家の一橋藩士を身内にもち、大阪から15歳で豊後（大分県）の竹田藩に嫁ぎます。やがて一女をもうけますが、時は幕末の動乱期、竹田藩も佐幕派から勤皇派に変わったために、この子センを婚家に残して離縁しなければならなくなるのです。この時、ツルは17歳でした。家どうしの政治的信条の違いのために乳飲み子を置いて実家に戻るといことは、現在では考えにくいことですが、きっと生木を引き裂かれるようにつらいことだったでしょう。

その後の1866年、ツルは五代友厚という薩摩藩士の世話でグラバーと結婚しています。ツルとグラバーとの間には、ハナと富三郎という二児があります。

この頃には近代的な戸籍ができるのですが（※2）、外国人と結婚した女性への蔑視のためにツルは除外され、子供達も無籍でした。後に、ハナの結婚や富三郎の就職の必要から戸籍がつくられますが、その時“作文”された箇所があったために、後世の混乱のもとになりました。

佐多：そのあたりを、お父上の平之助さんの業績を継がれた野田さんが調査されたのですね。



のだ・かずこ

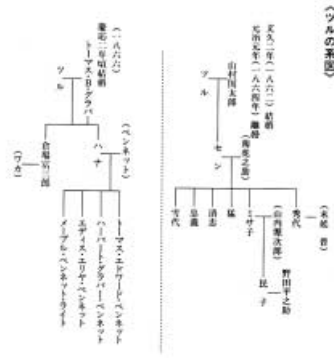
1949年生まれ。長崎市出身。ツル・グラバー夫人の玄孫にあたる。グラバー夫人を研究する父・平之助氏の背を見て育ち、父の著書『グラバー夫人』（新波書房）の再版を機に、その遺志を継ぐことを決意。95年、踏査解明の結果を『長崎談叢』に発表。現在、暁星国際学園理事長秘書。



野田：ええ。父は長崎の諫早の生まれで、大分の女性と結婚しました。昭和10年ころ、姑に「母センの話によれば、祖母ツルは外国人と再婚した。その外国人は『長崎でソロバン・ドックをつくった』という。今は音信不通だが、長崎にお墓があれば探してほしい」と頼まれます。父は国鉄の職務の合間をぬって、人づてにその外国人がトマス・グラバーであること、妻ツルと子をなしたことをつきとめました。ツルのお墓もその父母、弟妹のお墓も長崎・浪の平町の大平寺というところにありました。さらに長男・富三郎の友人であった人にも会うことができ、だんだん、ツルの人となりなども分かってきました。ツルは「グラバー邸で内外のお客をもてなす時はいつも蝶の紋付を着ていた」ので、“お蝶さん”と呼ばれていたことや、お墓と位牌に蝶の紋が刻んであるのを確かめています。

佐多：かつて『蝶々夫人』のモデル論争があったが、決着がつかず、グラバー邸がオペラの舞台によく似ているために“蝶々夫人ゆかりの地”とされた、と聞きました。

野田：原作『蝶々夫人』の作者はジョン・ルーサー・ロンゲ



ツル・グラバー夫人 (袖に蝶の紋が見える)

という米国人弁護士ですが、彼は一度も日本に来たことがありません。姉でメソジスト派宣教師の妻であったサラ・コレルが滞日中に見聞した話をもとになっており(※3)、第二版の序文の中で、ヒロインが実在の人物なのか空想の産物なのかという質問に答えて「両方だ」と書いています。その“実在”部分、つまりツルと蝶々夫人との共通点は、先程申しました蝶の紋が残っていることや、「港の見える丘の美しい家」とグラバー邸との酷似のほかに、宣教師との交際(ハナと富三郎とともにメソジスト派のミッションスクールに在籍している)、互いの住居の位置関係もほとんど同じ。さらに、蝶々夫人がピンカートンとその妻に赤ん坊を引き渡すことになって自殺をはかるのが17歳ならば、ツルが歳の娘センを残して離婚したのも17歳です。

佐多:オペラでは「かわいい坊や、お母さんを忘れないで」と絶唱し、短刀自殺しますね。

野田:郷土史家の人たちは、この17歳で自殺した人をモデルと考え、さんざん探しますがどうしても見つかりませんでした。

しかし、原作者のロングはオペラ歌手の三浦環に「私の聞いた実際のお蝶さんは死んでおらず、子供を育てた」と語っています(※4)。

ツルはグラバーと添い遂げ、52歳の時、病のために東京の芝で亡くなりました。その当時グラバーは三菱の顧問を勤めており、『岩崎弥之助伝』には「ツルは聡明温順な貞淑な婦人であった」と記されています。

ですから、『蝶々夫人』にはツルの人生や人間性が大きく関与してはいるが、それはあくまでも原形としてのモデルであって、全てが同じわけではありません。例えば、ピンカートンの存在などは“空想”部分ではないかと思います。

オペラが人気を博したのは、当時流行したオリエンタリズム(東洋趣味)や、子供を置いて自害するヒロインの悲しみと武士の娘としての誇りが、人々の心に訴えたのかも知れません。

佐多:以前、評判だというミュージカル『ミス・サイゴン』を観

ました。これはフランス人が書いた『蝶々夫人』の焼き直しなんですが、最後に米兵夫妻に子供を渡して、ベトナム娘が自殺するんです。明治時代ならいざ知らず、現在これだけ女性の地位が変化したにもかかわらず、ただ言いなりになるなんてあり得ない。むしろ、その男を撃ち殺すぐらいの見せ場があってもいいですよ(笑)。この米兵の無責任さと単細胞に対する作者の揶揄を感じて、私は不快でした。野田さんは女性としてどう思われますか。

野田:もし私だったら、やはりただでは済まさないでしょうね(笑)。現代ならば、母親としての強さをもっと積極的行動で表現することが可能と思います。

蝶々さんが喉をつく短刀は、父の形見で、「榮譽ある生なくば、死の榮譽を得るために」と刻まれてあります。ここで原作者は暗に、武士の血を引く蝶々さんの強い意志と矜持を描いています。

私がこの度の調査研究を通して最も興味をもったのは、原作に宗教や人の生き方への問いかけが含まれている点です。作者が弁護士で、宣教師の妻の姉の話をもとに書いたことを考え合わせても、『蝶々夫人』には単なる娯楽を越えた人間の精神性が込められているように思えます。プッチーニの初演も、この点で原作に忠実であったと知り、そうであればこそ、多くの人に感動を与えているのではないかと思います。

(※1) 杉山伸也著『明治維新とイギリス商人—トマス・グラバーの生涯—』(岩波新書)
(※2) 明治5年の壬申戸籍
(※3) 1933年11月10日付ニュー・ヨークタイムス特派員伝
(※4) 三浦環『私のお蝶夫人』(昭和10年12月付時事新報) 環は2000回以上蝶々夫人を演じ、グラバー邸にその銅像がある。

VITALITE

インタビュー